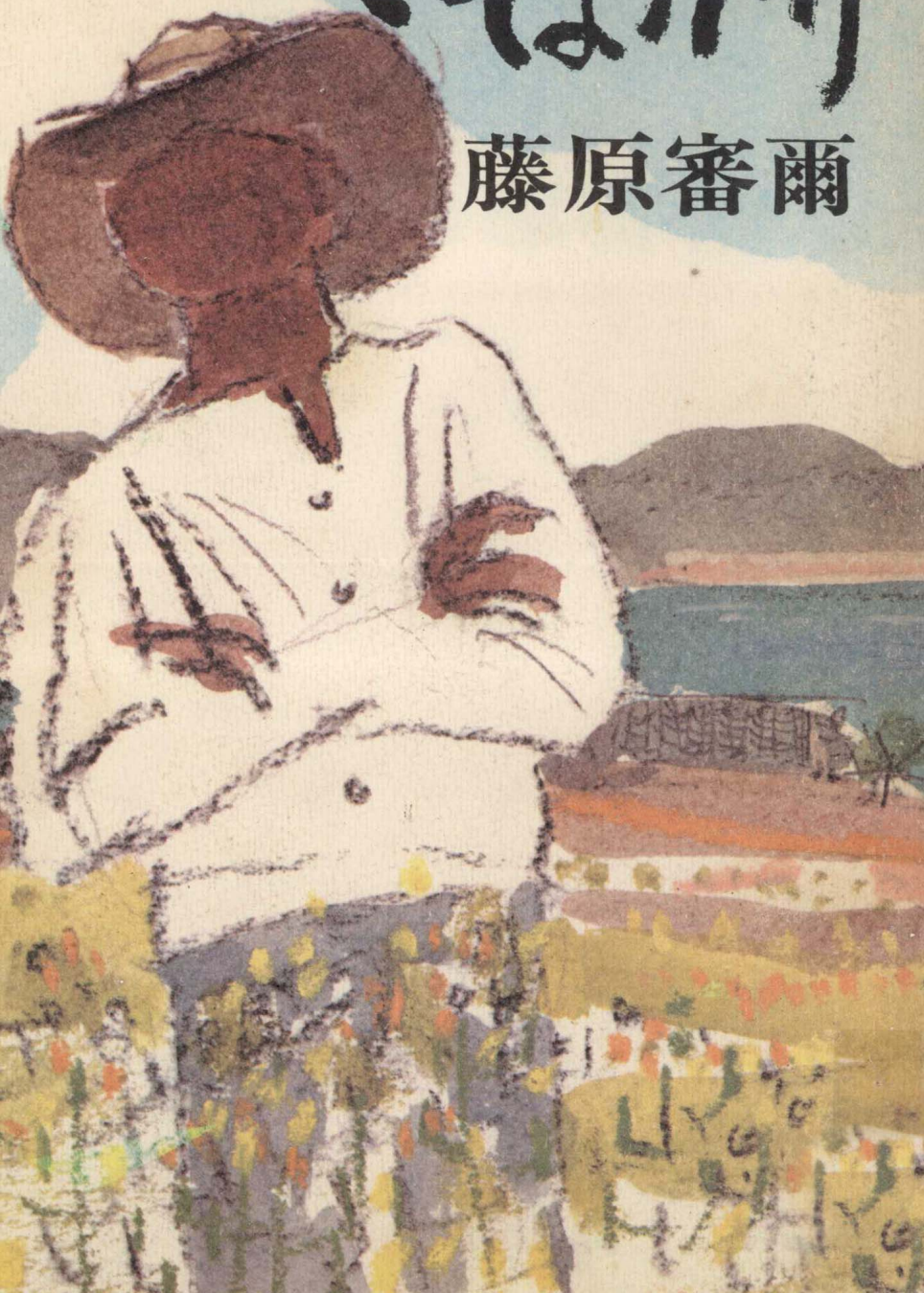


へまがり

藤原審爾



藤原審爾
へそまがり

中央公論社

へそまがり

定価八二〇円

昭和四十九年三月三十日印刷

昭和四十九年四月七日発行

著者 藤原審爾

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(五六一)五九二一

振替東京三四

©一九七四 検印廃止

へそまがり

わたしは五十歳、つまらぬ紙袋会社の総務部長である。普通の会社なら、総務部長といえは重要な椅子で、繁多な仕事をこなさなければならないのだが、うちの社では総務部は社長一族の溜り場である。それもあまり出来のよくないぐうたら溜り場で、わたしの仕事はそういう連中の監視と若い工具さがしが主なるものである。しかしこの椅子を与えられると、三年で役員になれることになっており、うらやましがられるポジションなのだが、わたしはその慣習をやぶってしまった。もう四年半も、この椅子にすわったきりである。といってわたしが無能というわけではない。むしろ人集めの才能があつて、わたしにかわれるだけの者がいないからである。昨年、新資本が入り、その資本の代表者が三人乗りこんできたせいもある。

その連中は大手の化学会社からやってきたのだが、土産にゴルフを持ってきた。わたしの義理の伯父にあたる社長は、学生時代剣道の選手だったから、スポーツ好きで、社内でもスポーツはさかんなのだが、どういうわけかゴルフをやる者は二、三人しかいなかった。それが新役員の土

産のせいで、課長はもとより係長までも、ゴルフ熱にとりつかれてしまった。なにもそのことにわたしは文句をいうつもりはない。新資本で、ビニールはじめの化学製品をつかって袋をつくりだしたので、お得意先もかわってきて、ゴルフのつきあいもしなければならぬ。それで売れるのならまことに結構である。しかし、ついこのあいだのように、部長会議を開くことを、ゴルフ場で決められたりするの、まったく迷惑至極だ。社長に、渋い顔で、

「なぜ部長会議に出席しなかったのかね」

ときかれて、はじめて知ったなどというのではかなわないのである。

今日は、会社主催のゴルフ大会なので、いたしかたなく接待の手伝いにきたのだが、やはりわたしは春の青いゴルフ場で落着くことが出来なかった。わたしの部の若い係長は、わたしがゴルフを贅沢な遊びだと思っていると勘ちがいで、なんだか、

「ゴルフはいまや大衆の娯楽ですよ」

などと力説したが、今日もまたそういうふうには思えなかった。なるほど経費はそんなにかからないし、健康な遊びにはちがいない。みんな汗をかいて、いきいきとしたのしげにやっている。しかしわたしは、それでもとうてい好きになれそうもない。

理由はわたしにとってはごく簡単なものなんだ。わたしの生れたところは瀬戸内の、半農半漁の村で、耕地がすこぶる少ない。山にまで段々畑がある。もっと土地があれば、ということばを、子どもの頃からわたしはよく聞いた。もっと土地があれば、もっと村の人達は豊かに暮せたらう。それを見ながら育ったものだから、広い立派な土地をただの遊びにつかうのが、もったいないよ

うな気がする。ほんとうのことをいえば、気に入らないね。なんとなくむっとしながら、きれいに刈りこんであるゴルフ場を眺めているうち、わたしは、ふいに、

へひっくりベソの実っあん

のことを思いだした。

わたしの村は、瀬戸内海の入海ぞいにある、南と北とにだらかな山なみがつづき、北の山なみの段々畑の下に村の家々が細長くつながっている。

南のほうの山は、二百米ほど西の入海へつき出ている、入海の東の岸には土手になった街道が、七、八百米一直線に村まで走っている。

街道の東側は七、八町歩の水田があり、六つの灌漑用の池が点在して、なめらかな水面をかがやかせている。

小川で結ばれたその六つの池の水嵩が、雨でふえて溢れかけると、街道の真ん中にある水門を開けて、入海へ流すのだが、その仕事をやっているのが実っあんだった。

実っあんはその水門のほとりの二階家へ住んでいて、百姓もやっていた。家のまわりの田圃が実っあんのものである。二階の床が街道とおなじ高さだから、街道へ幅広く短い橋をかけ、二階を茶店にして、女房のお藤さんにやらせていた。

水門の外の入海は、潮がひくと干潟になって、小さい二十米四方くらいの池と、みおしか水がなくなる。

ずいぶん小さい頃からわたしは、そのみおへ魚をとりに出かけていたので、もとは実っあんより実っあんの女房のお藤さんと親しかった。お藤さんは、身綺麗なきちんとした人で、感じのいい働き者だった。高い葦簾よしずがたてかけてある店の中から聞えてくる声がまた、とてもきれいで澄んでいた。それにひきかえ実っあんのほうは、いつもぼろを着ていて、無口でさっぱり冴えない、おとなしい小男だった。いきいきしたお藤さんと一緒にいると、実っあんは風采があらなくて、下男かなんかにみえた。通りがかりのトラックの運転手が、ラムネをのみによったりして、実っあんを下男と間違え、そこにいるのに、平気でお藤さんをかまったりすることがよくあった。わたしらは子供心にも、はらはらしたが、実っあんはそんな時、知らんぷりをして、こそこそ階下の部屋へおりていってしまい、わたしらをなんとなくがっかりさせたものだった。

だいたい村には、みんながよくする評判斬しのようなものがあった、わたし子供にもいつとはなく伝わってくるのだが、実っあんの話は数も少なくて、それもあまり派手なものではなかった。

たとえば実っあんはさっぱり煮えきらない男だという証拠に、小学生の頃の实っあんの話がよく出る。暮の寒い日のことなのだが、夜になっても学校から実っあんが帰って来ない。それで実っあんの両親が心配し、村へやってきて実っあんを探しまわった。暁方ちかくなつて、実っあんはやっと真っ暗な教室でみつかった。担任の先生が実っあんを立たせたまま、その罰をあたえた。

のをつい忘れ、実っあんをおっぱりだしたままで、家に帰ってしまったのだった。普通の子ならとつゝに逃げだして帰るところなのに、実っあんはじつと真っ暗な教室で、先生の許しを待っていたのである。ばか正直にもほどがある。

ところが、そんなところが、ひく手あまたのお藤さんの気に入って、夫婦になったものだから、これまた一っ時、村は大騒ぎだったらしい。今に別の男に似た顔の赤ン坊が生れるぞと、村の暇人たちは期待したそうだが、あっさり期待は裏切られ、いつまでたっても赤ン坊は生れてこなかった。それで今度は、わしが代りにいつてやろうという台詞がはやったそうだった。

村の連中は娯楽が少ないものだから、ついそんなことを言ったりしてたのしむ、つまらないくせがある。しかし実っあんのほうにも、話の種にしたくなるような、邪魔っ気なところがある。いらいらさせられるほど、ばかっ正直なんだ。いじめて奮起させてやりたくなるような男なのである。

そんなふうだから、実っあんは村の連中から、なんとなくうとんじられていたが、わたしは実っあんが好きだった。

実っあんは、見かけはぼろっちいが、ほんとうはすごく勘がよくて、魚とりなんかとてもうまい。家のすぐ下の水門のある溜池で、泳ぎながら、岸辺の蘆いんの間に休んでいるせいごや鰯いわしを、すうと掴みどりにする。それにいろんな遊びを知っていて、もっそりしているようだが、実際はたのしくやっているのである。

わたしに釣竿をつくってくれ、釣りを教えてくれ、よく夜釣りに連れて行ってくれた。べつに

実っあんは、こまごまと教えてくれるわけではなくて、ちょっと一ト言いうだけだったが、その一ト言がとても役に立った。

たとえばその頃わたしは、入海の干潟のみおへいって、はげやどんこつを手づかみでとっていた。小学生の膝くらいの深さのみおの中へ、わたしは古い運動靴をはいて入って行く。カキで足をきることがあるので、その用心に運動靴をはくのだが、実っあんは、

「若、はだしになりんせえ」

と言って、わたしの運動靴をぬがせてしまった。小学生のわたしは、運動靴をぬぎ、はだしになり、おっかなびっくりでみおへ入って行ったものだが、その一ト言でわたしはほんとうに得をした。

はだしでぬるぬるした海底を歩くのは、とても気持ちがい。なにより気持ちがいなのは、はげやうなぎをふみつけたときの、くるくるっとあばれる感触である。いまでもはつきりその感触をわたしは覚えている。子供の頃を偲ぶと、二、三日は、その感触を思いだしてしまうし、もし実っあんに教えられていなかったら、多分わたしは野や山の風景を、銭湯のペンキ画のような、生きた人間のいない美でしか見ることが出来なかったような気がする。

このゴルフ場を眺めていて、実っあんのことを思いだしたのは、そのことと関係があるかもしれない。ここは、実際ペンキ画のように、野に生きている虫や伸びほうだいの草や花の生命と関係なく造られている。

それがわたしを落着かせないのだろう。

実っあんは、なんだかぼけっとしていて、普通の男のような、よその家の財産のことや女や、威張ったりすることに、まるで関心がない。気のぬけたラムネみたいであるばかりでなくて、世の中のことが見えないようなところがあった。しかし実っあんはほんとうはなんでもよく見ているし、頭もとてもよいんだ。小鳥のことだって、よく知っているし、魚のことならなんでも知っている。

「若にだけは教えてやろう」

と言って、実っあんは、うなぎのとり場を一の弟子のわたしに教えてくれたことがあるが、水門のある溜池やその上の小川や、その先の池に、ちゃんと仕掛けをつくっていた。鍵型の直径十五糎から二十糎の土管を、岸辺の泥の中へ横に埋めこみ、うなぎの寢床をつくってやっている。むろんうなぎの餌がある場所で、うなぎの好きな場所が、実っあんにはよくわかるんだ。そしてその仕掛けが見つからぬように、土管の口の前へ石をおいたり、杣くさをうっておいたりしてある。実っあんは、人目につかないように、そこへ夜中にいつて獲るのである。うなぎばかりでなくて、しじみもどじょうも、そんなふうな場所をつくってやっている。

それを秘密にしているのは、折角の獲物を横とりされるからでもあるが、そればかりでなくて実っあんは、必要以上にとるといのがきらいなのである。

いつか鱈の群れが溜池に入ってきたことがあって、わたしら子供は大騒ぎして、それをとりだ

したのだが、途中で実っあんは、

「もうええじゃろ」

と水門をあけて鰯を海へ逃がしてやった。釣りにいったときでも、ある程度釣れると、もうええじゃろといってやめてしまう。まるで実っあんは魚が全部自分の財産とも思っているみたいに、そういう決定をするのだが、乱獲をもったいながるといふよりむしろ、自然の秩序にのっとって獲っており、秩序を破らないように注意しているのだった。

だから実っあんは、獲った魚を売ったりはしないし、自分たちの食べる分と店でつかう分しか獲ろうとしなかった。生きた魚を売ると、店で売るとどうちがうのか、そこところの違いはすこぶる微妙で、多分、心での加工がほどこされているので、いささか店売りのほうが、気楽なのだろう。

心での加工といえば、実っあんもお藤さんも料理がとても上手である。お藤さんのほうは料理ばかりでなくて、盛りつけも上手だが、実っあんのほうは、ぜんぜん盛りつけや見た目に拘泥しなくて、味だけの一点ばりである。

魚のどこの部分がおいしくて、どう料理すればもっとうまくなるかを、実っあんはよく知っている。鰯のへそだとか、ひらめのはんがわとか、ばりの煮つけだの、このわたやうなぎのきもだのが、ずいぶんうまいものだということを、わたしは実っあんから教えてもらったものだった。

料理といえばこんなことがあった。わたしが中学一年生になったばかりの秋、わたしの従兄が隣り町のわたしの同級生の姉さんを見合いをした。わたしはその友達の家へなんとか遊びに行っ

たことがあるので、その姉さんをよく知っていた。背のすらりと高い、とても綺麗な人で、なかなか上品でもあった。

わたしもその見合いの日が日曜だったので、従兄たちと一緒に友達のうちへ出かけて行った。こっちは、従兄の母親とわたしの父親の四人連れだった。

そのころ見合いというと、相手の女性が料理をつくって、男性側をもてなすことになっており、わたしはその期待で出かけていったのだが、姉さんの料理は見た目は綺麗だったけれども、味つけは荒っぽくてあまりうまくなかった。しかし弁護士のお卵の従兄は、姉さんの美人のところが気に入ったらしくて、広い庭のむこうの茶室で、姉さんといぶん永い間なにかべちゃくちゃ話していた。

ところが従兄の母親とわたしの父とは、うちへ帰ってくると、目尻に皺をよせていて、

「あの料理じゃあね」

「どうも肝心なところがわるくてはな」

と意見が一致して、姉さんと従兄の結婚をあつさりことわってしまった。わたしは、学校で顔を合せる友達に、なんだかよくないことをしたようで、しばらく具合がわるくて困ったものだった。

この隣り町の地主の娘と従兄が見合したことを、お藤さんは知っていて、遊びにいったわたしに、見合いの結果はどうなったかをきくものだから、わたしはしかじかだと答えたのだが、すると実っあんは、そのとき店の料理場で、包丁をとぎながら、なんだかすごく変な感じの笑い声

をたてて、

「料理がまずいんじや、しょうがねえわあな」

と言ってから、へんな目つきでわたしと話しているお藤さんを見て、にやにやした。

「料理上手をもらったおかげで、わしゃア助かつたらア。えへへへ」

「ばか、子供の前で、そげんこと言うちゃあいけんよ」

お藤さんの顔は、ぼうっとあかくなっていて、満更でもない表情だった。

料理は勘と情愛の一つの芸だから、それが下手糞なら、閨ねやの中でも芸なしというわけなのである。後年、それで見合いの席で、手料理を出させる習慣があったと知ったが、むしろそのときは、なんのことやらさっぱりわからなかった。しかし、おかしなはなしだが、その時、わたしはなんとなく実っあんを見直した。小鳥や魚とりのことばかりでなく、いろんなことを実っあんはよく知っている偉い男だと思ったものだった。

実っあんは、もっさりしていて、きびきびしたところがないのだが、のろまというわけではない。のろまでは、蘆の間にひと休みしている鰯やせいごを、手だけで掴みとったり出来るわけがない。といって実っあんは、目にもとまらぬ早業で、ぱっと魚をつかまえるというふうでもない。蘆の間の鰯のところへすうっと近づいて行き、とるつもりなのかとらない気かわからないような顔をしているうちに、ごぼっと鰯が暴れて水煙りをあげる。あっと思ったその時には、もう鰯は

実っあんにしっかりつかまえられて暴れているのである。わたしは、実っあんのように鱈をつかみどりしたくて、ずいぶん一生懸命にやったが、鱈の胴に触れるのがやっとで、たいていは触るまえにごぼっと逃げられてしまう。

「それんこっちゃ駄目じゃ」

よく実っあんにそういわれたが、それではどうすればよいのかを、実っあんは教えてはくれなかった。なかなか実っあんはきびしい師匠で、ずっとあと一度だけそのこつの一端を教えてくれた。ちょうど溜池の水門をあけたばかりの時、とんびが池のほとりを低空飛行をやっていて、そのたびにその鳥影で蘆の間の魚が水煙りあげて逃げていた。その折、流れに乗って木切れが、蘆の間をあちこち蘆にごとんごとんとぶつかりながら通り抜けだした。その木切れを指さして、実っあんはあの木みたいに鱈へ近づくと、鱈は逃げないと教えてくれたものだった。

なるほど鱈は木切れでは逃げたりしないのである。

それでわたしは、なにか会得したような気持ちになって、それをやってみたが、不肖の弟子なんだ。やはりわたしはさっぱりつかまえることが出来なかった。もっとやさしいみおでのはぜとりでも、実っあんのように簡単にやれなかった。はぜを踏みつけると、わたしはどきどきしてあわてて逃がすまいと思つて、足に力を入れて、よけいにはぜをびっくりさせてしまうのだが、実っあんは顔色をかえたりしないで、足を掻くみたいに、すうとかがんで、みおの底からすうとはぜをつまみあげるのである。

そんな様子は、魚の習性をよく知っているというより、それ以上の自然のしくみを、実っあん

は心得ているというようだった。

実っあんは、なにか心得ていなければ、そんなぐあいにいかないだろうと思えるほど、実際おかしな知恵がある。井戸のことだってそうなのである。

実っあんの家は、土手ひとつむこうが海で、土手の内側はむかし埋立てたところなので、井戸がない。実っあんの父親の草さんは、あっちこっち家の裏に井戸を掘ってみたが、塩水しかわいてこなかった。それでも諦めきれなくて、とうとう動けなくなるまで掘りつづけたものだから、村の連中にわらいものにされ、へそ曲りの草やんという仇名をもらってしまった。

ところが実っあんは、なにかの本で今のんでいる水は、三百年ほど前の水を汲みあげて飲んでもおるといふことを読むと、しばらく土手から田ん圃や山なみのぐあいを眺めて暮し、半年ばかり経つと、家から七、八十米ほどはなれた田ん圃を、三坪買いこんで、そこへ井戸を掘りだした。それでまたまた実っあんは、村の連中のわらいものになり、へそ曲りの親父に輪をかけたような男だということで、たちまち、

ひっくりベソの実っあん

という仇名をいってしまった。

ところがどうだろう、たった一発で実っあんは、どうやら飲める程度の井戸を掘りあてたのである。村の連中は、いささかびっくりしたが、もともと水がそこにあって、それを掘りあてただけだし、それで倉をたてたというわけではないから、実っあんの眼力のすごさを別に問題にもしなかった。だいたい村の連中ときたら、一度や二度の成功くらいで、自分の考えをかえたりして